

ポローニア

paulownia

vol. **31**

目次

- 2 教育局教育長挨拶
ポローニア巻頭言
◆石隈利紀
- 3 はばたけ海外へ
—国際舞台で活躍する生徒と教育長との座談会—
◆遠藤寛子
- 4 附属学校の声を学長に届ける会
◆西垣昌欣

早春の筑波を訪ねて —附属中学校3年生
筑波大学訪問・研究学園都市見学—
◆小山 浩
- 5 附属高校2年生 筑波大学訪問
◆藤本和哉

大学との連携による野外実習と
新しい教員養成 ～「総合地球科学入門」と
「理科野外実習インターンシップ」～
◆本弓康之
- 6 蓼科生活 ～附属高校 第1学年のHR合宿～
◆大内康宏

第29回全国盲学校野球大会優勝!
◆中妻智也
- 7 パリ国立聾学校との交流活動
◆武林靖浩

地震津波避難訓練 及び
引渡し訓練・非常食の日
◆河場哲史
- 8 教育局 公開教員研修会・
研究発表会のお知らせ



絵:「赤い実のなる木」福原聖叶(附属小学校4部3年)





TOSHINORI
SHIKUMA

グローバル人材とは

附属学校教育局 教育長 石隈利紀

この度スポーツの国際舞台で活躍している3人の高校生と座談会を行いました。座談会はとても楽しく、話はずみました。あらためてグローバル人材育成について考えてみます。私が考えるグローバル人材とは以下の3つの能力をもち、さらにその基盤として3つの特徴をもつ者です。まずグローバル人材の3つの能力とは、

①**自分の文化的アイデンティティをしっかりともち、異文化を尊重し、理解しようとする**：自分の文化が心柱（しんばしら）であり、他の文化に触れることで自分が揺れたり変わったりします。自分と異なるものを“interesting”と思う気持ちが大切です。

②**他者と関わることができる**：これは「コミュニケーション能力」や「人間関係構築・維持能力」です。そしてコミュニケーション能力には、語学力が必須であり、母国語の日本語能力と外国語能力が求められます。今日ではグローバルで活躍するためには、共通語としての「英語」の能力がきわめて有効です。

③**チームでの問題解決に参加し貢献することができる**：国際平和をめざし、維持可能な世界をつくるためには、多文化のメンバーからなるチームワークです。

さらに、これらの能力を育て発展するためには、3つの素養が必要だと思います。

(1)**心身の健康を保つ姿勢をもつ**：病気や悩みをもたない人はいません。病気や弱いところのある「自分の心身」を受け入れ、育て、自分とうまくつきあう素養です。

(2)**「学び」への肯定的な態度、学ぶ習慣、そして基礎学力を身につけている**：グローバルの世界で生きていくためには、つねに新しいことを学ぶことが必要です。学び続ける力こそ、新しい環境や課題への適応を支えます。

(3)**「勇気」をもつ**：上野通子参議院議員（前文科省政務官）は“Braveであれ”と言われました。私のカウンセリング心理学の師匠である國分康孝先生は“Courage to be”と言われます。未知の世界で新奇の課題に取り組むためには、勇気が必要です。

今回座談会でお会いした3人の高校生は、女子アスリートでした。3人には躍動する力と未来への意志を感じました。3人に共通しているところには、①他者（担任、姉、母）との関わりでスポーツを始めた、②マレーシアやシンガポールなど外国（異文化）でパフォーマンスを上げるため、とまどいながら調整している、③自己をよく観察し成長を続けているなどがあります。自己・他者・異文化と関わりながら、自分を高める工夫や努力は、グローバル人材への道だと思います。Keep your dream high!



「はばたけ海外へ」国際舞台で活躍する生徒と教育長との座談会

附属学校では、様々な分野で活躍している生徒が多くいます。10月号No31では、スポーツ分野で国際的に活躍した3名の生徒を迎え、石隈教育長との座談会を企画しました。

●**石隈（附属学校教育局教育長）** まず初めに、国内外で活躍した競技とそのきっかけを聞かせてください。

○**八尾陽夏（やおはるか／附属桐が丘特別支援学校高等部2年）** アジアユースパラリンピックで100m走、200m走、走り幅跳びで3つの金メダルを受賞しました。幼い時から「かけっこ」が好きでしたが、小5の時に脳梗塞で右半身が麻痺になり、医師からは回復は難しいと言われました。リハビリで食べること、しゃべること、立つこと、歩くことができるようになりました。次は、小6での運動会で縄跳びをすることです。担任の先生と跳び方を一緒に考えて、右手を下げ左手を上げた状態で跳ぶ方法を見つけました。「工夫すればできる」ことが分かり、陸上競技に挑戦しました。

○**石井茉宏（いしいまひろ／附属高等学校2年）** インターハイの水泳競技400m自由形が第2位、ジュニアオリンピックで

400m自由形、800m自由形で優勝しました。幼稚園の時に水泳を始めました。きっかけは、水泳をやっている2歳上の姉に「負けたくない」と思ったからです。小学校でスイミングクラブの選手コースに入り、最初はバタフライ、その後は個人メドレー、そして一番好きで得意な自由形に落ち着きました。

○**小野智華子（おのちかこ／附属視覚特別支援学校鍼灸科2年）** 水泳競技に取り組んでいます。得意種目は100m背泳ぎで、ロンドンパラリンピックで8位に入賞しました。母が水泳をやっていて、幼い頃からお風呂等で水慣れをさせてくれました。先天性の視覚障害ですが、気づいたら水が好きになっていました。療育センターに通っている時に月に2度プールへ行き、そこで水泳が好きになり、小学校1年生の時に障害者の水泳教室に通い始め、本格的に取り組み始めました。

●**石隈** 八尾さんは担任の先生、石井さんはお姉さん、小野

さんはお母さんというように、競技を選んだり続けたりするには他者の存在が大きいんですね。次に、国内遠征や海外派遣などで学んだことや困ったことを聞かせてください。

○**八尾** アジアユースが開催されたマレーシアのクアラルンプールではスパイシーな味が苦手で、持参したカップラーメン等の日本食を食べていました。日本に帰ってお味噌汁を飲んだときはもう涙がポロポロ、日本は最高だなと思いました。飛行機の離陸の瞬間も苦手です。走り幅跳びの助走と踏み切りにもつながるので、慣れていこうと思います。

○**石井** 水泳の日本選手権とジャパンオープンは東京の辰巳国際水泳場で行われ、東京育ちの私には辰巳がホームで泳ぎやすい。でも、シンガポールでは、スタート台が違いました。日本は SEIKO ですが、海外は OMEGA が多いので、試合前の練習で調製しなければなりません。

○**小野** 海外の試合では英語が共通語で、変更などの場内放送も電光掲示板もすべて英語です。英語は苦手で聞きとりにくく、状況把握ができずに戸惑うこともありました。

●**石隈** 異文化やアウェイで3人とも苦労したようですが、そこでの調整能力は競技以外の今後の人生にも生きてくると思います。では、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決定しました。その感想と、2020年をどんな年にしたいか聞かせてください。

○**八尾** 今年のアジア大会で全力を出し、2016年のリオ、2020年の東京につなげていきたいです。選考大会で優勝し、記録だけではなく「まだまだいけるぞ!」という自分の伸び代をアピールする必要があります。

○**石井** 2020年の東京開催が決まり嬉しかった。オリンピックで女子400m自由形に出場するには、4月の日本選手権で派遣標準記録4分6秒を切らなければなりません。この記録を破っている日本の女子選手は誰もいませんが、これからは4月に調子を合わせて練習していきます。

○**小野** 私10月のアジアパラリンピックで全力を出し、2016年のリオでしっかり決めて2020年に臨みたいと思っています。そして、鍼灸科で学んでいるので、体のメンテナンスも自分で行っていきたいと思っています。

●**石隈** 3人とも自己観察力や自分を磨く探究心が旺盛で、すばらしいと思います。主に自分との戦いを強調していましたが、他人との比較という点ではいかがでしょうか。

○**八尾** 気にしないと強がっても、他者は気になります。それはマイナス面も少しありますが、プラスに変えるよう一所懸命努力しています。

○**石井** 決勝は8人で泳ぎ順位を争いますが、周りを意識し過ぎると自分の持ち味を出せなかったりします。でも、他者との



勝負でもあるので、意識しないのも難しいです。

○**小野** 自分との戦いですが、やはり隣のコースの選手の波が気になることがあります。曲がって接触し、叩いて叩き返すみたいなこともあります。ロンドン五輪の予選では、すごく近くに隣の選手がいて、その選手を抜くぞと思って泳いだらギリギリ8位で決勝に残りました。目が見えない分、触った瞬間にさらに燃えます。

●**石隈** それでは、うまくいかない時や負けた時の対処法、自分を立て直す方法を教えてください。

○**八尾** 負けた時は悔しいので、思い切り泣きます。思い切り泣いて、次は負けないと気持ちを切り替えて練習します。

○**石井** 自分は負けた時に相手のことを尊重します。その上で、改めて勝ちたいと思うようにしています。

○**小野** 負けた時は、負けた原因を考えます。コーチにフォームの分析をしてもらい、悪かったこと、改善すべきことを確認します。自分が負けた選手との比較も行います。

●**石隈** 最後に、将来の夢を聞かせてください。

○**八尾** 私の最終的な夢は高校の体育教師です。難しいことは分かっていますが、挑戦する気持ちは常に持ち続けています。自分の経験を活かして、できない子や障害を持った子に体育の楽しさを教えたいと思っています。

○**石井** いま、すごく悩んでいます。水泳競技をやめた後は、まだ行ったことがないフランスやイギリス、ヨーロッパの国々に行ってみたいと思います。

○**小野** いま鍼灸の勉強をしているので、それを活かしてスポーツ鍼灸に携わりたいと思っています。痛みや障害が出た部位に理学療法はもちろん、鍼や灸の力を使って緩和していくというようなやり方です。

●**石隈** 本日は貴重なお話をありがとうございました。競技を通して活躍すれば世界が広がり、勉強の場が増え、視野がさらに広がります。ここでの経験は、一つ一つが将来への大きな財産になります。これからアスリートとしても、その後に社会に出ても、うまくいくことばかりではないと思いますが、これまで積み重ねてきた財産は様々な形で生きてくるはずですよ。これからも、元気で活躍されることを望んでいます。

座談会「はばたけ海外へ」を終えて

附属学校教育局広報戦略推進委員長 遠藤寛子

今回初めて、海外で活躍した生徒たちを座談会形式でご紹介しました。目標を見据え果敢に挑戦する姿に勇気づけられたと共に、社会人の私が生徒たちから生き方のヒントを学んだような気がしています。この記事から多くの読者が刺激を受け、前向きな気持ちになることを願っています。



附属学校の声を学長に届ける会

附属桐が丘特別支援学校 副校長 西垣昌欣

筑波大学のトップである学長が、附属学校に通う幼児児童生徒の保護者代表と懇談する。こんなユニークな会が行われているのを、皆さんご存じですか？

毎年夏、11附属学校のPTA会長が集まり、学長を迎えて懇談会が開かれています。学長懇談会は平成23年度に始まり、今回で4回目となります。本年も7月5日（土）、附属桐が丘特別支援学校（板橋区）を会場に、永田学長を含め総勢36名が集まりました。

当日、各校のPTA会長は午前中のうちに集まり、学長との懇談に備えて準備トークでお互いの緊張を和らげました。午後になり、石隈副学長（附属学校教育局長）と共に来校された永田学長は、参加者を前に挨拶され、その後全員で附属学校間の交流の様子（ヤングアメリカンズショー等）をまとめたビデオ映像を鑑賞。そして会場校の校舎を見学した後、いよいよ本番の懇談会がスタートしました。

各校順番に学校を紹介し、子どもたちの活動の様子を報告。それに併せて、各校が困っている事柄や大学側への要望等が話されていきました。各校とも午前中の準備トークを経て準備万端で臨んでいるので、話に熱がこもり、あっという間に予定していた2時間が過ぎてしまいました。各校の抱える課題は様々ですが、永田学長からは「必ず一回は各要望にレスポンスする」との力強い言葉をかけていただき、一堂に会した参加者は一様に安堵した表情を浮かべて閉会となりました。



今回の懇談会に参加して改めて感じたことは、「附属学校の声が直接学長に届く」ことのありがたさです。それも保護者の代表による「学校現場の生の声」がです。こればかりは、教員の立場では伝えられない声であり想いです。それを、昨年度就任直後に11附属学校すべてを訪問された永田学長が、リアルな問題として受け止めて下さる。そんなやりとりを目の当たりにし、大学と附属学校のキヨリがずいぶん近くなったような印象を持ちました。

余談になりますが、桐が丘特別支援学校では毎年度末、高等部卒業生が学長室を訪問し、卒業報告を行っています。今年3月にも卒業生が訪問し、永田学長と懇談させていただいたのですが、その時に学長から出された開口一番の話題は、学校が要望を続けている事項の話でした。一附属学校の要望を、学長が常に気にかけて下さっていることに、生徒と共にたいへん驚き、そして感謝いたしました。

附属学校の声を直接学長に届けることができる懇談会が今後も継続され、筑波大学の附属学校として各校の教育がさらに充実していくためのよい機会になることを願って止みません。



早春の筑波を訪ねて

— 附属中学校3年生筑波大学訪問・研究学園都市見学 —

附属中学校 副校長 小山 浩

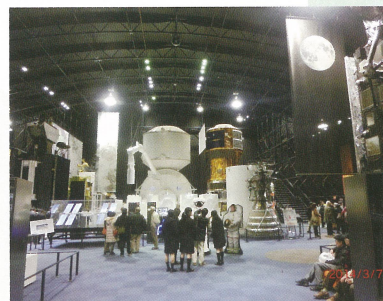


2014年3月7日、前年に引き続き、卒業間近の3年生約200名を「私たち附属中学校の母体である筑波大学を知り、併せて自分の進路を考える一助とする」ことを目的に、筑波大学と周辺の研究施設訪問を実施しました。このプログラムは、毎年この時期、全ての教科授業を終え、中学校生活3力年を総括するために行うファイナルコースの一環として行われました。当日、クラス毎5台のバスに分乗し、茨城県つくば市にある筑波大学に向かいました。大学では、村田芳子現校長、藤堂良明前校長先生他多くの大学の先生方に迎えられ、体育専門学群大講義室で筑波大学の概要を聴講し、大学生諸君によるダンスパフォーマンスの歓迎を受けました。その後、「Power」（体育専門学群）、「Education」（大学院修士課程教育研究科）、「Life」（生命環境学群生物学類）、「Art」（芸術専門学群）、「Medical」（医学群）の5コースに別れ、中学の学習では触れることのない、より高度な内容の講義を受講しました。担当していただいた先生方には、専門分野の内容や専門領域を研究するためには何が必要かなど、中学生にでも理解できるよう、懇切丁寧にお話していただきました。引率した私たち附属中学校の教員も、参考になることばかりでたいへん感謝しております。

午後は各学群の食堂、いわゆる学食（生徒はこれも楽しみに

していました）で昼食をとった後、生徒の興味に応じてコースを再編し、テーマ毎に研究学園諸施設の訪問を次のように行いました。①「宇宙を知る」（JAXA・高エネルギー研究所他）、②「未来を知る」（CYBERDYNE社・JAXA）、③「生物科学」（筑波実験植物園・動物衛生研究所）、④「国土を知る」（防災科学研究所・国土地理院）、⑤「治水と農林水産業」（土木研究所・食と農の科学館）の5コースです。研究施設で働く方々と接し、日本の基幹研究を推し進める研究の現場に触れ、生徒にとっても自分の進路を深く考える一助になったものと思います。

弥生三月、春も近い筑波大学のキャンパス、研究学園都市を堪能することのできた一日となりました。また卒業前の、仲間達との良い思い出になったと思います。



附属高校2年生 筑波大学訪問

附属高等学校 教諭 藤本和哉

5月8日に附属高校の2年生全員で筑波大学を訪問しました。ここ数年、2年生のこの時期に実施していますが、大学で研究の最前線の様子を見せていただくことで学問に対する興味・関心が高まり、将来の進路を考えるよい契機になっています。また、筑波大学を訪れるのが初めてという生徒も多く、附属高校の生徒としての自覚を持つきっかけにもなっています。

午前中は大学会館ホールで芸術学系世界遺産専攻の吉田正人先生と黒田乃生先生に講演していただきました。吉田先生からは琉球諸島における生物の多様性と世界遺産登録の可能性について、黒田先生からは琉球王国のグスク及び関連遺産群についてお話していただきました。沖縄への修学旅行を11月にひかえている生徒にとって、たいへん有意義な事前学習になりました。

午後は数名～十数名のグループに分かれ、研究室を訪問しました。教育推進部社会連携課の仲介によりさまざまな分野の31の研究室にご協力いただいたので、生徒はそれぞれ関心のある分野に、少ない人数で訪問できました。限られた時間ではありましたが密度の濃い体験ができ、どの生徒もおおいに刺激を受けたようです。この行事の実行委員長を務めた相川元宏君による、研究室訪問の感想文を以下に紹介します。

「私は比較文化学類の授業を体験しました。授業ではシベリア鉄道の中で様々な国の人が様々な言葉で互いに交流するドイツ映画をみて、そこから多文化について考えました。私たちの学校で行われる英語の授業は出来るだけ日本語を使わないように工夫されていますが、始めから最後まで全く日本語を聞かない授業というのは始めてだったので、授業後は少し疲れていたのを覚えています。しかし、教鞭を取ってくださったヘーゼルハウス先生は私たちに伝わるように身振り手振りを交えながらわかりやすい英語を心がけて下さり、私たちも積極的に授業に参加し、拙いながらも英語で自分の言いたいことを表現しました。同時に、英語で相手に伝わるように話す難しさも学びました。これから社会に羽ばたく私たちにとって、このような経験は今後大きな財産になることと思います。」



大学との連携による 野外実習と新しい教員養成

～「総合地球科学入門」と「理科野外実習インターンシップ」～

附属坂戸高等学校 教諭 本弓康之

附属坂戸高等学校では、平成23年度から毎年夏休みに「総合地球科学入門」という3泊4日の野外実習を長野県信濃町黒姫高原で行っています。この実習は、大学教員（中村徹前校長・生命環境系久田健一郎教授・生命環境系角替敏昭教授）、博物館学芸員（野尻湖ナウマンゾウ博物館近藤学芸員）による専門的な講義や様々な実習、野外活動（星空観察・黒姫山登山・キャンプファイヤー・飯盒炊飯等）を実際に現地で行い、総合的に地球科学全体を生徒がイメージしながら体験的に学ぶことのできるESD（持続発展可能な教育）の考え方を取り入れた附属坂戸高校独自の実習方法です。

また、この実習には筑波大学大学院教育研究科理科教育コースの大学院生が「理科野外実習インターンシップ」の授業として参加し、附属坂戸高校の教員補助として実際の教育現場を体験する取り組みも同時に行っています。宿泊を伴う野外実習は特殊な教育現場ですが、そのほとんどが将来教員を目指している大学院生にとって教員と同じ視点で経験できるとも貴重な経験になっていると思います。

生徒の感想

- ・知らなかったことを知って、自分ができることが増えていくのは楽しかった。
- ・4日間とも疲れていたが、その分の楽しさがありとても楽しかった。
- ・登山は辛かったですが、中村先生の辛い時には植物を見るんだという教えはすごく私を助けてくれました。植物に全く興味がない私ですが、ブナの葉やヒカリゴケ、御前橋を見つけた時は「ああ!」となって楽しくなりました。

大学院生の感想

- ・教師という立場で実習に参加したため、宿泊学習に対する教師の大変さを身をもって実感することができました。
- ・野外実習で生徒を見る、接するという機会は今までにない初めての経験であり、非常に多くのことを学ぶことができた。
- ・教育実習で教師の第一の仕事は教科指導なので、授業研究に力を入れ教科の専門性を高めていくことが大切だと考えていたが、今回の経験から、教師は生徒理解から始まりそれに合わせて臨機応変な対応を取ることが大切なのではないかと感じた。



蓼科生活 ~附属高校 第1学年のHR合宿~

附属高等学校 教諭 大内 康宏



桐陰寮は標高1500mの白樺高原に位置し、昭和4年に開設されてから、既に80年以上の歴史を持ちます。10万㎡を超える敷地は、森あり、水路あり、岩場あり、広場ありと、起伏に富んだ地形です。そんな豊かな自然に囲まれた寮舎で、毎年7月下旬から8月上旬にかけて、附属高校1年生がクラスごとに合宿を行います。

寮での生活に、都会の常識は通用しません。飯盒炊爨は、まず森で薪を集めるところから。ナタやノコで枝を切り、背負子(しょいこ)に積んで運びます。土を掘ってカマドを作り、ようやく火がついたと思ったら、火力の調節に一苦労。みんな身体中燻されて、煙の臭いが取れません。カレーの鍋に灰が入ったり、飯盒のご飯を焦がしたり、誤って鍋をひっくり返し、灰の中からニンジンやジャガイモを拾い集めて、洗ってもう一度温め直すことも…。スイッチをひねればガスが点く、お腹が空いたらコンビニで、という生活に慣れた生徒たちにとっては、苦勞の連続です。

生徒たちの必需品、携帯・スマホは使用禁止で、主要な情報伝達手段は「声」。東京から乗ってきたバスは生徒を置いて帰ってしまうので、現地でのほぼ唯一の交通手段は「足」。地図とコンパスを頼りに遠足に出れば、迷うこともしばしば。GPSもインターネットも使えない状況で、目で見て、耳で

(水音などを)聞いて、足で歩いて、地図上の情報と照らし合わせて、自分たちの位置を推測します。付添のOB・OGは生徒をギリギリまで迷わせておくので、班員で協力して正しい道を見つけなければなりません。

夜は間仕切りの無い(良く言えば)山小屋風の寮舎で、みんなで囲炉裏を囲み、毛布にくるまって眠ります。最初は部屋に入ってきたカナブンに大騒ぎしていた生徒も、3泊4日の間には、枕元を蛾が飛び回っても平気になります。

こうして寝食を共にしつつ、蓼科山登山、キャンプファイヤーなどを行う間に、級友との絆は深まり、入学以来、少しよそよそしかったメンバーとも打ち解けて、3年間のクラス活動の基盤が作られます(附属高校では3年間クラス替えがありません)。係を分担して、レクを企画したり、生活を管理したりする中で、本校のモットーである「自主・自律」の態度を身に付け、皆で協力することによって個人では実現できない、より大きな「自由」が手に入るのだということを経験する場でもあります。

今年は、天候に恵まれ、全クラスが計画した行事をすべて行うことができました。今後の各クラスの成長が楽しみです。



第29回全国盲学校野球大会優勝!

2014年8月、神奈川県で開催された全国盲学校野球大会で、私たち筑波大学附属視覚特別支援学校は念願の全国制覇を果たすことができました。

大会は3日間に渡り行われ、どの日も猛暑の中での試合でした。その上、一戦一戦が緊迫した試合で、最初から最後まで気の抜くことの出来ない非常に難しい試合でした。

大会2日目の予選リーグ2試合目、私たちは東海選抜チームと当たりました。初戦で北海道高等盲学校を下し、勢いあるままに試合に入ろうとしたのですが、初回東海選抜の打線に捕まり、いきなり5点を失う苦しい展開になりました。その裏に2点を返したものの、差を詰めることが出来ず、3回にはまた2点を追加され、7対2という状況で最終回を迎えることになりました。最終回、私たちの攻撃は下位打線から始まり、試合を見ていた人の中には東海選抜の勝利を確信していた人も多かったと思います。しかし、私たちはまだまだ諦めていませんでした。半ば強がりだったかもしれませんが、それでも、一人一人が集中して最後まで声を出し続けた結果、四球とヒットで3点差まで縮めると更にチャンスを作り満塁の状況で1番打者に。私たちは下位でランナーを溜め上位で返す野球を理想としてきたので、最高の形でその状況を迎えることが出来ました。そして理想通り、1番打者が3塁打を放ち走者一掃



附属視覚特別支援学校
高等部専攻科
鍼灸手技療法科3年
中妻智也

で一気に同点に追いつくことができました。結果は同点で終わりましたが、勝ち点1を取ることができ、決勝トーナメントに進むことが出来ました。

準決勝ではエースの丹羽君が神奈川県選抜を打たせて取るピッチングで無失点。打ってもコンパクトに繋ぎ完勝しました。そして、迎えた決勝戦。相手は福岡高等視覚特別支援学校でした。東海同様初回到強打とエラーも絡み3点を失いましたが、2回裏またも下位打線から始まる攻撃で四球と安打でランナーを溜めると上位でしっかりと点を返し逆転勝利による優勝を掴みました。

この1年、全国大会での優勝を目標に激しい練習を積み重ねてきました。時には、チーム内で意見が食い違い口論になることもありました。それでも、一つ一つしっかり話し合っ解決し、最後にはチーム全体が一つになって戦えたことが優勝に繋がったと思います。この大会で諦めないこと、チームプレイの大切さを学び、それを今後の人生にも生かしていきたいと思います。



パリ国立聾学校 との交流活動

附属聴覚特別支援学校 教諭 武林靖浩

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成25年12月11日より12月16日の日程でパリを訪問し、本校の姉妹校であるパリ国立聾学校 (INJS: Institut National de Junes Sourds) と交流活動を行いました。参加者は、本校高等部生6名、専攻科生4名、引率4名でした。

パリ国立聾学校は、1971年創立の世界最初の聾学校で、パリ市のほぼ中央にある5区に位置し、古くからの学生街として知られる場所にあります。ホテルから学校まで生徒達と歩く中で、周りには歴史的建造物があり、パリに立っているという感動とこれからとの交流への期待で胸が膨らむ思いがしました。

交流は、金属加工・園芸・衛生設備・マルチメディアの職業教育の見学から始まり、昼食は学校内のカフェでブッフスタイルの昼食、校長室訪問、地理や美容の授業を参観しました。また、音楽室、マルチメディア室等の施設見学も行いました。翌日は、体育館で体育の授業を通しての交流が行われました。両校の生徒達は卓球やバドミントンを通して楽しく交流を行いました。

その後は、パリ聾学校の生徒や先生にパリ市内を2日にわたって案内していただきました。有名な凱旋門に行ったり、フランスの手話劇を観劇したり、2日目の夜は生徒達が楽しみにしていたシャイヨ宮に行きました。ここはパリ16区にあり、エッフェル塔が間近に見えるビューポイントで、エッフェル塔のシャンパンフラッシュを見ることができました。パリ聾や本校の生徒達は、4ヶ月後に日本で再会を果たすことはこの時にはまだ知るよしもなく、また再会することを約束して固い握手を交わして別れを惜しんでいました。

最終日は、ルーブル美術館、ノートルダム寺院等の見学をし、フランスの歴史と文化を学びました。

今回の交流を通して感じたことは、生徒達のコミュニケーション力の素晴らしさでした。カフェテリアでの昼食時や交流授業の中で、本校生徒は、電子辞書を片手に英語を介してお互いの国の手話を教え合い、それを突破口に身振り手振りでいつの間にか会話が成立していきました。通じ合いたいと思う気持ちがあれば文化や言葉の壁を超えられることを、肌で

感じた交流活動でした。最後に生徒のアンケートで「どんなに離れていても同じ人間だと認識できました」という言葉を見て、この交流を実施した意義があったと思いました。

地震津波避難訓練 及び 引渡し訓練・非常食の日

久里浜特別支援学校 教諭 河場哲史

筑波大学附属久里浜特別支援学校 (以下、本校) は、神奈川県三浦半島に位置し、目の前に雄大な太平洋が広がります。大変眺めの良いところですが、海にとっても近く、万が一津波の来る恐れがある場合は、直ちに避難をしなければなりません。そこで、本校では、毎年「地震津波避難訓練及び引渡し訓練・非常食の日」を設定して、非常災害等に備えています。

避難場所は、隣接の国立特別支援教育総合研究所所有の山の中腹にあるフットサル場です。私たち教職員と幼児児童は、親しみを込めて「裏山」と呼んでいます。裏山は標高30メートル以上あり、初めて上るときは、大人の足でも大変な場所ですが、子どもたちは日々の体力づくり活動で上っているので、全員が自分の足で上りきるだけの体力をつけています。また、なじみの場所でもあるので、訓練などの特別な場面でも落ち着いて避難をすることができるようになってきています。

幼児児童の非常食は、それぞれの家庭で準備をしていただいで預かっています。朝、昼、夜の三食を子どもの好みや食べやすさ等を考慮し、調理をしなくても食べられるものを前提に選定をしていただいています。毎回の非常食体験で、何がどれだけ食べられたかを記録し、それらを保護者の方にお伝えすることで情報を共有しながら常に見直しを図っています。

今年度の訓練は、まだ残暑の厳しい9月5日(金)に実施しました。訓練を繰り返すことで、子どもたちは防災頭巾をかぶり裏山へ避難することがスムーズになってきました。昨年度から教職員が張ったテントへ入り、非常食を食べる体験もしています。テントの中でも落ち着いて食事ができるようになってきています。引渡し訓練として迎えにきた保護者との連携も順調に進みました。日頃の成果と課題が分かる訓練となりました。



平成26年度 筑波大学附属学校教育局 主催 「公開教員研修会」

平成26年度筑波大学附属学校教育局主催の「公開教員研修会」を、次の要領で開催いたします。お忙しい頃とは存じますが、お誘いのうえ、ご来場いただきますようお願い申し上げます。

1.日 時：平成27年 2月28日(土) 10:00～12:10 (開場・受付9:30～)

2.場 所：筑波大学 東京キャンパス文京校舎 1階 134講義室
(東京都文京区大塚3-29-1)

3.プログラム

開会の辞……………筑波大学附属学校教育局 江口勇治
教育長挨拶……………筑波大学附属学校教育局 教育長 石隈利紀
講 演……………「ダウン症の娘と共に生きて」講演後質疑応答
発 表……………附属久里浜特別支援学校の子どもの様子
閉会の辞……………筑波大学附属学校教育局 江口勇治 (映像での紹介)

4.参加費 無料

5.申込締切 平成27年1月30日(金)

6.対 象 筑波大学教職員及び学外教育関係者等

申し込み・お問い合わせ先

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学東京キャンパス事務部 学校支援課 教育企画担当
TEL:03-3942-6809 FAX:03-3942-6911

平成26年度 筑波大学附属学校研究発表会

附属学校教育局では、平成26年度研究発表会を次の要領で開催いたします。本学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆様方にご理解をいただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

日 時：平成27年 2月28日(土) 13:40～18:00^{予定}

場 所：筑波大学 東京キャンパス文京校舎 (東京都文京区大塚3-29-1)

詳細については、今後、附属学校教育局ホームページ
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp>にアップします。
ご確認ください。

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia (後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



発行日……………平成26(2014)年11月30日

発行者……………附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……………スピーチ・バルーン

印 刷……………広研印刷 使用紙: U-Jimax [日本製紙]

